

まえがき——本書の構成について——

中世都市鎌倉の考古学的解明をめざしてきた著者の、論考の主要なものを収録したのが本書である。なかには三〇年以上前のものもあり、大幅な加筆修正をすべきかとも思ったが、著者なりの考え方の進み具合をたどり直す意味で、あえて大きな変更を加えなかった。

そもそも鎌倉が都市であるか否かとか、どんな類型の都市かというような議論は措くこととする。文献史学ならば上記の点はまず第一になされるべきだろうが、考古学は「もの」や「場」で説明せねばならず、発掘調査で得られた事実には素直に向き合わなければならないからである。しかし事実のみにふりまわされることのないよう、著者が鎌倉解明にあたって念頭においていたのは、左に示す一〇項目である。

- ① 都市としての鎌倉の範囲——時間と空間——
- ② 幕府——政権の諸機関と軍事的施設
- ③ 都市インフラの整備
- ④ 大小御家人の屋敷(宿所)と構造
- ⑤ 宗教的施設の設置と変遷
- ⑥ 都市住民とその住居(町)
- ⑦ 経済——特に消費——と物流、および銭と倉

- ⑧ 信仰と呪術、および遊芸者
 ⑨ 都市における墓葬——「やぐら」と浜——
 ⑩ 都市鎌倉の終わりとその後——「武家の古都」——

著者は一九七〇年代から四〇年間、鎌倉の考古学的調査にかかわってきた。その中で右の項目のすべてに答えが見出せたかとなると、「日暮れて道遠し」の心境にある。現在の、早足で歩けば一時間くらいで縦断できる狭い鎌倉も、場所のちよつとした違いや発掘できる範囲によつては、見えてくるところには大きな差ができる。また、発掘調査は一人の力でできるものではなく、多くの人の協力があつて成果があがるものなので、著者の考えに異をはさむ人なしとしない。

それでも、鎌倉解明のために考え、論じてきたところを、鶴見大学を定年退職するにあつて一冊の著作集としてみた。

第一部には、中世都市鎌倉の全般的な問題を論じたものを集めた。先にあげた①～⑩の項目が多く含まれているのが1章と5章である。

第二部には、都市内部に居住した人々に関するものを集めた。5章はちよつと遊びめいた鎌倉への時間旅行であるが、ひとつの試みとして加えておいた。

第三部には、鎌倉の出土遺物に関するの論考を収録した。一九八〇年代のまだこなれていない論もあるが、当時から京都など他地域との関連を追っていたことを示すものとして入れてみた。5章と6章は内容が重複するものの、二〇年間で鎌倉研究がどれだけ進んだか(あるいは停滞したか)を示すものとして両方を収録した。

本書に収録した論考は語句の訂正などをのぞき、初出時の形を生かすようにした。異例なことではあるが、初出年を各章タイトル下に示してある。その後の新出資料によつて直すべきことがらや、考え方を改めた点は、各章節の末尾に〔付記〕として示すようにした。

ところで昨二〇一四年に、『鎌倉研究の未来』（中世都市研究会編、山川出版社）という本が出た。その最後のほうで五味文彦氏が、鎌倉が世界遺産登録を果たせなかつた理由のひとつに「鎌倉からの発信力不足」をあげられている。博物館設立の話が何度も浮上しては消えるという行政の消極性はもちろんあるが、考古学サイドから「都市」を語るための基本資料をまとめ、さらに見直す作業ができていなかったことは指摘どおりである。かといつて実物資料をひろげて見られるようにすることは物理的に困難であり、また「発掘調査報告書」の頒布も市民レベルどころか、研究者にも充分届いていない現状をどうすべきか。

そこで著者は現在、本書の編集と同時進行で、ある企画を進めている。先に示した①～⑩の項目をもとに、各項目を細分化して（考古学的な分類ではなく、生活上の側面から民具論的な見方で）、遺物・遺構の実測図を集成的にまとめた『鎌倉考古図集』（仮称）を作っている。そのこの各項につける解説は考古学的なものだけでなく、文献史学はじめ関連諸学からの指摘にこたえられるようなものをめざしている。

本書ではこれまでの著者の考えを収録したが、右の図集は今後鎌倉研究を進める若い人々に役立つものになると思う。

目次

まえがき―本書の構成について……………1

第Ⅰ部 中世都市の歴史景観

1章 鎌倉のなりたちと変遷……………9

2章 中世都市鎌倉の環境―地形変化と都市化を考える―……………35

3章 鎌倉は陰陽道的都市か?―中世都市の形をイメージする一試論―……………81

4章 中世鎌倉尺度考・予察編……………93

5章 政権都市「鎌倉」―考古学的研究のこの十年―……………133

第Ⅱ部 武士と商・職人の実像

1章 「都市的な場」と鎌倉―商人・職人の鎌倉への入り方―……………161

2章 鎌倉の武家屋形と都市住居―中世鎌倉市街地の居住様態―……………177

3章 佐助ヶ谷指図の再検討―中世都市鎌倉の復原に向けて……………207

4章 鎌倉・都市の道、都市からの道……………251

5章 ある郎等の鎌倉暮らし……………261

第Ⅲ部 遺物が語る都市の内実

1章 鎌倉の搬入土器と在地土器……………291

2章 中世鎌倉火鉢考―東国との関連において……………313

3章 鎌倉の中世遺物―白かわらけ・瓦器まね土器・瀬戸内系土師質土器……………347

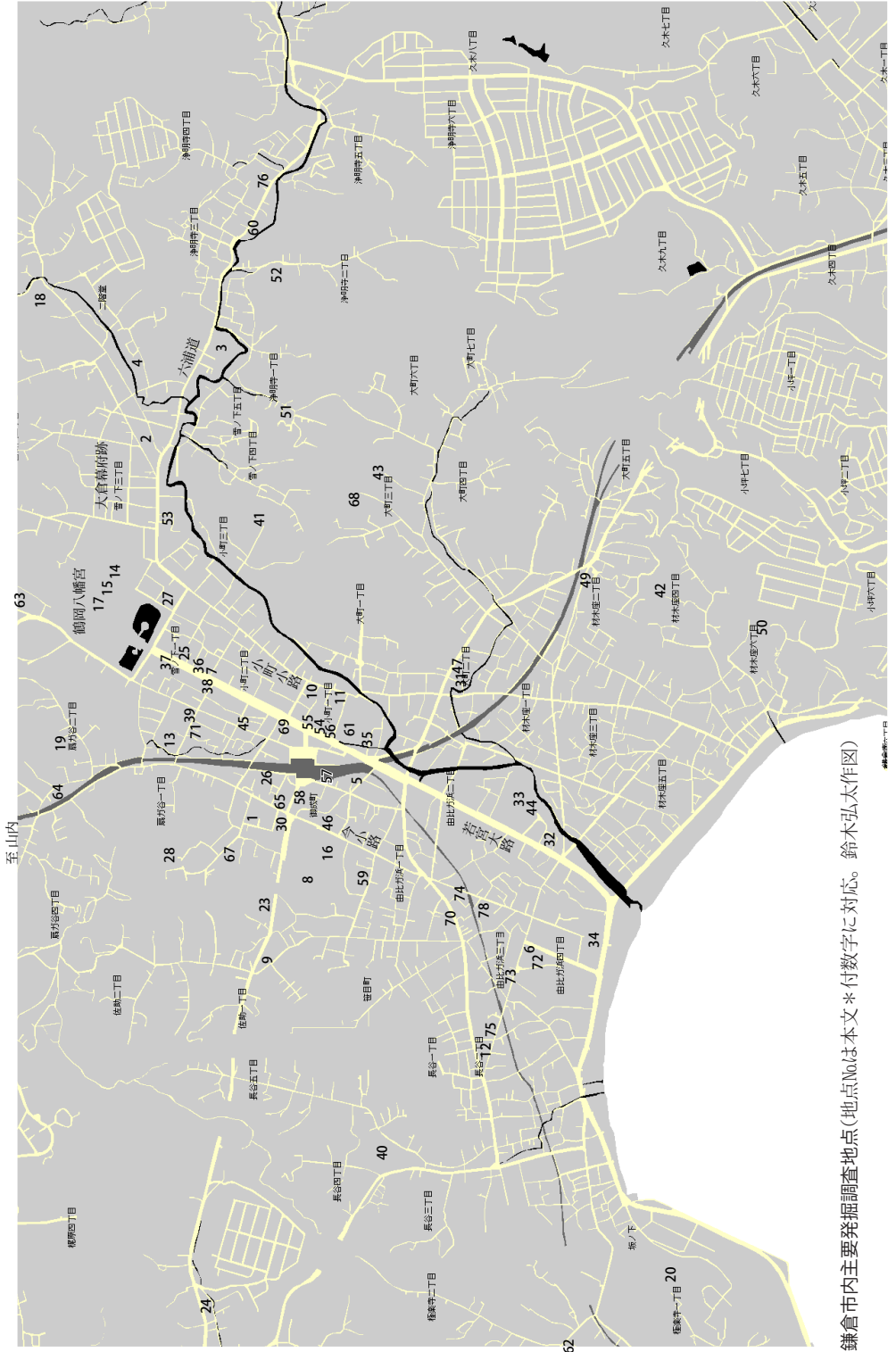
4章 中世鎌倉銭貨考……………367

5章 中世鎌倉動物誌―都市遺跡出土の動物遺体と関連遺物からの予報……………405

6章 都市鎌倉における動物……………439

初出一覧 464

あとがき―鎌倉考古学と私― 466



鎌倉市内主要発掘調査地点(地点No.は本文＊付数字に対応。鈴木弘太作図)